

サイエンスコミュニケーター だより

Volume 5, June 2017



みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？ サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座」を開講し、その修了生はいまや200名以上となっています。

本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターでつくる有志団体「国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）」と、みなさんをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。

サイエンスコミュニケーターの声

科学嫌いだった私の科学普及活動

私は今、東北の福島県内で科学普及活動を行っている様々な機関・個人のネットワークを構築する事業プロジェクト「ふくしまサイエンスぷらっとフォーム（以下：spff）」の事務局で働いています。事務担当ではありませんが、いわゆる事務仕事だけでなく、会議の準備・各種調整、科学イベントの準備や運営（企画、調整、広報活動）、実験工作メニューの研究・開発など、様々な業務に携わっています。県内各地の科学イベント、会議などに参加し幅広い年齢層の方々と触れ合いながら、科学普及に微力ながら尽力しています。

しかし、10年前の私は自分が科学普及に関する職に就くなど、夢にも思っていませんでした。

以前より若者の理科離れが指摘されていますが、学生時代の私は、まさにその当事者である「理科嫌い」人間でした。大学での専門分野は日本史。高校時代、歴史に興味があったのに加え、心のどこかで「日本史なら科学に関わらずにすむ！」という考えもあったように思います。そんな私が、大学で取得した学芸員の資格を生かしたいと就いた仕事は、まさかの科学館でした。当然、最初は非常に苦労しました。ですが、展示物の解説や、サイエンスショーの実演など来館者対応をするなかで、大嫌いだったはずの教科書の科学が、実は身の回りにたくさんあふれていることに気付いたのです。それからは、あんなに嫌いだった科学が面白いと思えるようになりました。

科学館での勤務ののち、縁あって、2012年より spff にお世話になっています。spff は、2008年に独立行政法人科学技術振興機構（当時）の支援をうけ、開始した事業で、福島県内の公的試験施設や科学館・博物館、企業、個人等が一つのネットワークとして連携し、福島県内の様々な地域にて科学コミュニケーション活動を行っています。2011年に起きた東日本大震災時には、この事業でできた

ネットワークを生かし、震災直後避難所となっていた spff 連携施設を機関の枠を超えていち早く訪問したり、海岸部より避難している子供たちがいる小学校で科学教室の開催などを行いました。現在も、県外の機関との仲介や、県内の教育機関と公的試験施設や企業との仲介なども行い放射線理解活動も継続して行っています。

また、サイエンスアゴラにも参加し（2011年、2014年、2016年）、福島県内の現状や課題などを県外に発信しています。

私は今でもお世辞にも科学に精通しているとは言えません。しかし、県内で科学普及に尽力している方の活動内容など、少しずつですがわかるようになってきました。科学普及への携わり方には様々なかたちがあります。私ができることは活動普及活動をしている人を支えることです。科学に詳しくないから、科学に詳しくない人の側に立つことができます。詳しい知識を持つ人に、わからない人はどこがわからないか伝えることができます。今後もたくさんの人と出会いながら、科学と人を繋げる手伝いをしていきたいと思えます。



福島県農業総合センターでの科学講座



渡辺 紘美

国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座 SC1 修了（11期）。

大学の文科系学部卒業後、2006年より郡山市ふれあい科学館で臨時職員として勤務。2012年より「ふくしまサイエンスぷらっとフォーム」の事務局スタッフとして福島県内の科学普及活動に従事している。

活動紹介

科博 SCA の会員は、サイエンスコミュニケーションに関連するさまざまな活動を行っています。今回は、サイエンスコミュニケーター養成実践講座（SC 講座）のプログラムとして開催された2つのサイエンスイベントをご紹介します。

化石に触れて絶滅した生き物の生態を探る

『絶滅した幻の奇獣を追う』～キミはどこに生き、何を食べたのか？～

2016年度 SC 講座受講生開催イベントその①（2016年12月10日開催）



謎に包まれた哺乳類、「デスモスチルス」。絶滅した彼らの生態は、どのようにして明らかになるのでしょうか？手がかりとなるのは、甲能直樹先生によるお話と数々の化石たち。実際に触ることのできる化石やレプリカに参加者は大興奮！参加者はグループに分かれて色々な角度から考えを巡らし、最終的にデスモスチルスのすみかと食べ物を論理的に説明することができました。仮説とその検証を積み重ねて謎を解き明かしていくサイエンスの面白さを感じてもらえた様子でした。

（SC 講座 11 期修了生 木島 真理恵）

海藻サイエンスカフェの回想

2016年度 SC 講座受講生開催イベントその②（2016年12月10日開催）



私たちは「先生のためのサイエンスカフェ 海藻で攻略！生物の分類」を実施しました。海藻研究者である北山太樹先生をゲストに迎え、研究者が分類を決めてきた変遷や新種発見のエピソードなど、科博の研究者ならではのお話を聴くことができました。また、赤色の美しい紅藻や生物の教科書で見たことのあるカサノリなど、参加者は色や形が様々な海藻押し葉を手にとって見比べていました。講義を聴き、実物に触れ、海藻の多様性を感じていただけたかなと思います。

（SC 講座 11 期修了生 村山ひとみ）

サイエンス・エッセイ「わたしの推しテン！」

科博 SCA 会員によるサイエンス・エッセイです。今回のテーマは「国立科学博物館内で一推しの展示」＝「推しテン」。これを読んだら、さっそく紹介されている展示を見に行ってみませんか？

キャンバスにはどのような色彩が宿るのだろう～バンピラプトルの体色復元を期待して～

地球館地下一階は、大迫力の恐竜に目を奪われてしまいがち。でも、展示をよく見ると、小さくて白く美しい姿に気が付きます。バンピラプトル。小さくて、まるで鳥みたいな姿。この恐竜を使って、恐竜の骨が発見されて復元されるまでが解説されています。その完成形たる成体復元模型が白色で表現されているのです。化石に残った組織から、恐竜の体の色を予想することが出来るそう。でも、この恐竜の色は分かっていない。では、なぜこの恐竜は白色で展示されているのでしょうか。



アルビノをご存じでしょうか。私たち生き物は遺伝子の関係から、ある一定の割合で白い個体が生まれることがあります。このような白い個体は昔にも

いたはずですが。どのような色をしているか分からない。それでも誤解を与えない復元模型を作りたい。考えた結論が白の姿だということです。その白さが真摯さを象徴しているようです。

この復元はここで終わりではないはずですが。新発見があれば、アルビノ以外の個体の復元もできる。白いその姿も科学の発展で塗り替えられていく。その白さは、科学の可能性を示唆してもいます。

科博にはこのような、現在分かっていることを真摯に伝えようとしている展示がたくさんあります。それらを見ることで、今何が分かっている、何が分かっているかが分かり、科学がこの先どのように進んでいくのかを想像することが出来ます。白いキャンバスがどのように色づいていくのか。科博でその未来に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

（SC 講座 11 期修了生 本間 知広）